

かわたな戦時遺構ガイドのすゝめ

川棚町戦時遺構ボランティアガイドマニュアル

この度、川棚町に残る戦時遺構をテーマにしたボランティアガイドをこれから志す方を対象に、「川棚戦争遺構ボランティアガイドマニュアル」を作成しました。

本冊子は(平成二十八年度)川棚町戦時遺構ボランティアガイド養成講座(主管…川棚町教育委員会)で配布された資料や、特攻殉国の碑保存会 故西村金造氏の編さん資料をもとに、主要とされる遺構群の基本的な事柄(背景や目的)を取りまとめています。しかし、今回参考にした資料は、当時嚴重に情報が統制されていた背景や、敗戦により多くの記録が処分されたことから、少ない資料や生存者の証言を基に作成しているため、今後、新たな情報により内容が、本冊子と異なる場合もあるものと想定されます。ついては、十分な調査検証を踏まえ、各自、書き換え及び書き加え、また、関係者と共有化を図り、本冊子をその都度実史に沿う内容に修正してください。

目次 - Contents -

□川棚町内の戦時遺構分布図	2
□長崎県内の主要関連施設	2
□川棚町と戦争の歴史(年表)	3
□川棚海軍工廠	4
川棚海軍工廠の開庁	4
川棚海軍工廠は日本一の水雷工場といわれた	4
川棚海軍工廠では九一式航空魚雷が製造されていた	4
工廠跡一帯に残っている戦時遺構	5
□疎開トンネル工場(石木郷)	7
川棚海軍工廠の分散疎開	7
□片島魚雷発射試験場跡	8
□川棚魚雷艇訓練所跡と特攻殉国の碑	10
特攻兵器の開発	10
特攻兵器「震洋」	10
川棚臨時魚雷艇訓練所の開設	11
震洋特攻隊の訓練と展開	11
特攻兵器「回天」・「伏龍」	13
陸海軍特攻兵器一覧表	14
特攻殉国の碑と慰霊祭	15
増改築と戦没者の増刻	15

川棚町と戦争の歴史

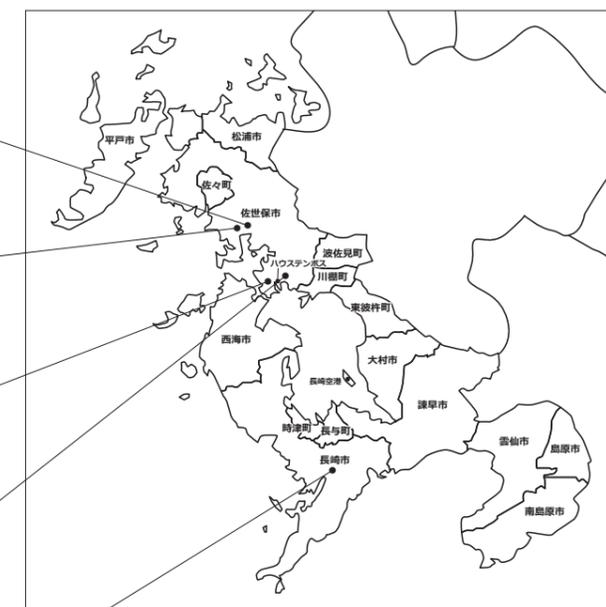
年次		川棚町の歴史	日本軍・政府の動き	世界の動き	
西暦	和暦 (月日)				
1918	T7	魚雷発射試験場開設(片島)			
1931	S6		満州事変勃発		
1932	S7		5.15事件		
1933	S8			ナチスがドイツ唯一の政党となる	
1934	S9	町政施行			
1936	S11	江川にコンクリート橋が架かる(低床橋)	2・26事件		
1938	S13 (4月1日)		国家総動員法公布	ドイツ、ポーランドに侵攻し第2次世界大戦が勃発 英仏がドイツに宣戦布告	
1940	S15 (9月27日)		日独伊三国同盟調印		
1941	S16 (4月) (12月)	工廠計画のための事務公舎建設	真珠湾攻撃	米英が日本に宣戦布告	
		佐世保海軍工廠川棚分工廠着工			
太平洋戦争勃発					
1942	S17 10月15日	佐世保海軍工廠川棚分工廠一部操業開始	ミッドウェー海戦		
1943	S18	川棚海軍工廠開庁			
1944	S19	川棚海軍共済病院設置 川棚海軍工廠疎開開始 疎開トンネル工場着工(石木) 横須賀から水雷学校の分校として 川棚魚雷艇訓練所(新谷・小串)開設 小串郷仮駅完工	日本海軍正式作戦文書要領に「特攻部隊」の項目が設けられる。 神風特別攻撃隊初陣(レイテ沖海戦)		
		3月10日		東京大空襲	
		5月 7月31日 8月6日 8月9日 8月14日		疎開トンネル工場完成(石木) 川棚空襲(死者69名) 長崎原爆被ばく者が川棚駅に200名近く運ばれる	ドイツ無条件降伏
		8月15日 8月28日		終戦 GHQ(連合国務司令部)開設	
1945	S20	川棚海軍共済病院が国立川棚病院となる。			
1946	S21	軍の上水道譲渡、町の一部に上水道敷設			
1947	S22	小串郷駅が現在の場所に開業	日本国憲法施行		
1948	S23	川棚町復興展開催			
1949	S24 (5月25日)	天皇陛下が本町ご訪問		東西ドイツ・中華人民共和国建国	
1950	S25 (6月25日)			朝鮮戦争勃発	
1951	S26 (9月8日)		サンフランシスコ平和条約締結		
1956	S31	東海炉材川棚工場創業			
1963	S38	大崎じゃく園開園			
1967	S42	特攻殉国の碑除幕・第1回慰霊祭挙行			
1972	S47		沖縄施設権返還		

川棚町内の戦時遺構分布図



長崎県内の主要関連施設

施設名	画像
旧海軍佐世保鎮守凱旋記念館 (佐世保市民文化ホール) 第一次世界大戦で海軍佐世保鎮守府に所属する艦艇が連合国側に属して地中海等で戦い活躍したことを記念して建てられたものです。 国登録有形文化財	
海上自衛隊佐世保資料館 (セイルタワー) 日本海軍の遺産を継承する施設とし、展示テーマ「波とうを越えて」を反映させ、日本海軍や佐世保鎮守府の歴史を展示し、無料で見学できます。	
針尾送信所 日露戦争において、日本海軍により建設された無線電信施設。高さ136mの鉄筋コンクリート造無線塔3基、半地下式の電信室、油庫、見張所などが良好な状態で残されています。 国登録有形文化財	
無窮洞 太平洋戦争中に旧宮村国民学校(現市立宮小学校)の防空壕として掘られたもの。掘削は高等部の生徒たちが行い、男子がツルハシで掘り、女子が整形を、下級生が運び出しを担当しました。	
長崎原爆資料館 長崎市への原子爆弾投下に関する資料を取り扱った長崎市立の資料館である。1945年8月9日原爆による被害の実相、核兵器のない世界を目指して、などのテーマに沿って、資料、写真、解説パネルなどが展示されています。	



川棚海軍工廠 (下百津地区)

かわたなかいぐんこうしょう

しももづ

●川棚海軍工廠の開庁

佐世保海軍工廠は、昭和十七年（一九四二年）初め、軍備増産と空爆被害の分散を図るため、百津郷の海浜約20町歩（ha）を埋め立てて工場を急増し、川棚分工廠を設置した。

さらに翌十八年（一九四三年）には、分工廠から格上げされて川棚海軍工廠は正式に開庁した。

《開庁までの経緯》

昭和十五年（一九四〇年）夏	下百津地区一帯を調査
昭和十六年（一九四一年）初め	城山東の丘に調査事務所が建つ
12月8日	太平洋戦争開戦
12月17日	佐世保海軍工廠から現地視察
12月21日	交渉予定地の地元住民に正月までの移転命令
昭和十七年（一九四二年）1月26日	地鎮祭と起工式
10月15日	佐世保海軍工廠川棚分工廠開庁
昭和十八年（一九四三年）5月1日	川棚海軍工廠として独立

●川棚海軍工廠は日本一の水雷工場といわれた。
川棚海軍工廠の機構は、総務部・会計部・第一水雷部・第二水雷部などからなる壮大なものでした。この機構が拡充されるにしたがい、川棚駅に到着する貨物は激増し、西日本の各地から人々がこの工場に動員されて、名も知れない寒村も、広くその名を知られるようになりました。

●川棚海軍工廠では九一式航空魚雷が製造されていた。

川棚海軍工廠では、主に「九一式航空魚雷」が製造されていました。航空機から海上の艦船攻撃のために開発された兵器です。九一式という意は、皇紀二五九一年（日本の初代天皇・神武天皇が即位した年を元年として年号を表した。西暦一九三一年・昭和十五年。）に開発された兵器とのことで頭に付けられています。

工廠での航空魚雷の目標月産は300本だったが実際は30本製造が限界でした。労働人数は1000人近く、佐賀・島原・松浦・鹿児島などからの学徒動員で連れてこられた少年少女もたくさんいました。

●工廠跡一帯に残っている戦時遺構

かつて海軍工廠施設が立ち並んでいた一帯は、戦後はそのほとんどの建物は取り壊され、現在は電子部品や食肉工場、県食肉検査場、自動車学校、パチンコ店、飲食店、東彼商工会、鉄工所、土木関係企業、住宅が広がっています。そんな中にひっそりと残る戦時遺構があります。

・赤レンガの倉庫2棟

一つは屋根付きで残っていて個人所有となっています。

もうひとつは、屋根はなく、外壁のみがところどころ吹き抜けて残っています。川棚町の所有となっていますが、特に用途はなく、野ざらし状態で、付近の住民が、建物内部を畑として利用しています。

・鈹滓レンガの倉庫1棟

現在は、周辺の会社の企業所有の倉庫として利用されています。

・地下防空壕

内部はかなりの広さがあると思われませんが、今は入り口がふさがれて入ることは不可能です。

《九一式魚雷の概要》

九一式魚雷は、航空機から投下用に開発・使用された。航空機といえば、九一式魚雷を指した。

(九一魚雷の特徴)

○水中突入時に飛散する木製の空中姿勢安定板を尾部に装着した。(一九三六年)

○ローリングを安定制御する角加速制御システム（DIP制御）を備えた（一九四一年）これは航空魚雷にとって最大の特徴・利点があった。

DIP制御によって九一式航空魚雷は、高度20m速度333km/hでしかも浅い軍港でも発射できるようになった、さらに九七式艦上攻撃機の水平最高速度378km/hを超える加速降下雷撃で荒れた海でも発射できるようになった。

全長5427^{mm}・直径450^{mm}・頭部重量213.5～526.0kg・搭載炸薬量149.5～420.0kg

水中走行速度77.8km/h・射程距離2000～1500m

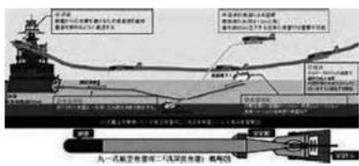
エンジン ウェットヒータ型8気筒星形エンジン

(参考) 他の形式の魚雷

九三式魚雷・九五式魚雷は水上艦艇と潜水艦で

使用された。

九七式魚雷は甲標的に使用された。



値段(1941年当時)
20,000円

重量	全長	直径	最大射程	炸薬量	水中走行速度
848kg	5.27 m	45cm	2,000m	235kg	77.8km/h



赤レンガの倉庫2棟



鈹滓レンガの倉庫1棟



地下防空壕



「工廠で働いていた人の話」



● Aさん(当時15歳)

- ・昭和19年初め、川棚尋常高等小学校(高等科)の報国隊として就業。昭和20年3月までいた。
- ・第一工廠にいた。
- ・昭和19年10月25日の大村大空襲の時には小首琴の防空壕に避難。
- ・昭和20年4月1日より学校からの推薦で平島にあった親和銀行に就職。リュックを背負って工廠従業員の給料を取りに佐世保本店に行っていた。
- ・5月1日より強制的に川原旅館の先の日通の事務所に就業。女性30人いた。原爆が落ちた日は机の下に避難。6年間経理を務める。
- ・終戦後米軍が来るから女は隠れるとの指示があった。
- ・今の城山カトリック教会にはもともと墓地があったが工員宿舍建設のため移転。
- ・大豆めしを食べていた。



● Bさん(当時18歳)

- ・実家松浦より挺身隊として川棚に来る。近隣町から5名ずつ徴用される。
- ・工廠1期生のため優遇され、ジュースや傘、履物が支給される。



● Cさん(当時14歳)

- ・佐世保女子商業学校4年生の時(昭和19年4月)、生徒動員で川棚に来た。50人クラスで班を作っていた。班長が号令を掛ける。
- ・川棚は初めての土地で宿舍もどこにあったのかわからない。

- ・「弘安の役」の歌を毎日歌って行進通勤。
- ・土木作業をしていた。
- ・ある女の子が機械作業中、鉄板で指第二関節から切断。泣きながら診察室に運ばれていた。
- ・ここで何を作っているのかわからなかった。
- ・工場全体は見たことが無い
- ・目の前の海を眺めて外で作業していた。
- ・鹿兒島からもたくさんの男子が来た。
- ・引率の先生が監督。
- ・食事は盛り切りの麦飯。
- ・おかずがあったのか思い出せない。
- ・新谷で何かの訓練をしていると聞いたが当時はわからず、最近になってテレビ特番で特攻艦「震洋」だとわかった。
- ・おかずが他の人よりちよつとでも少ないとけんかに。すると教官に班全員が外に並ばされ、連帯責任として全員ビンタ。
- ・実家は農家(吉井町)で、煎り豆を持たせてくれたのでこっそり食べていた。
- ・休み時間、白い服の士官さんがみんなを集めて歌を教えてくれた。家路の歌「遠き山に日は落ちて」タイトルがわかったのは戦後に進学した学校にて。
- ・川棚には半年いた。

九七式艦上攻撃機 戦歴



真珠湾攻撃では、九七式艦上攻撃機は、143機が出撃し、内、九一式航空魚雷を搭載した雷撃隊40機、雷撃隊はアメリカ海軍太平洋艦隊の戦艦4隻を含む6隻の艦艇を雷撃、魚雷36発を命中させている。大戦中期ごろまでは母港で運用され、後継機の天山が登場してからは主に陸上基地などから運用されたり、レーダーを追加装備して対潜哨戒や輸送船団護衛にも就いた。そして、大戦末期には一部が特攻に出撃している。また、1945年8月下旬、北千島へ侵襲してきたソ連軍上陸船団に対し、占守島に残存していた北東航空隊所属の数機が陸軍機とともに出撃して爆撃を加えており、これが日本海軍艦上攻撃機最後の戦闘になった。

疎開トンネル工場 (石木郷)

●川棚海軍工廠の分散疎開

戦局が厳しくなり、川棚町も米軍による空襲の恐れが大きくなったので、百津の海軍工廠の施設を昭和十九年(一九四四年)春頃から分散疎開することになりました。石木川沿いの山裾にトンネルを掘り、疎開工場地としました。

トンネルの数は現在確認されているのは十七本。実際には20本以上あるといわれています。高さ3.2m、幅4m、奥行きは最長のもので47mあります。全面がコンクリート造りで、最奥部で相互に連結しています。

このトンネルに魚雷製造に必要な工作機械を据え付け、8時間労働3交代24時間フル操業で作業されました。

トンネル作りには、地元住民、朝鮮人労働者、動員学徒、小学生も従事していました。



川棚海軍疎開工場トンネル工場跡



疎開工場本部

八幡山の南麓、上石木の1氏宅地が、疎開工場の総務部として使用されました。宅地の裏山に総務部専用の防空壕トンネルも作られました。主坑道長149.2m、総延長221.4m、特に広い部分は幅5m・高さ3.5m・長さ41.6mあります。多くの部屋に仕切られ、会議室や事務所などがありました。防空壕の出入り口(兼換気口)は数箇所設けてあって、車道から見るができます。ご真影(昭和天皇と皇后両陛下の御写真)を奉納する奉安殿も特別に設けてあります。

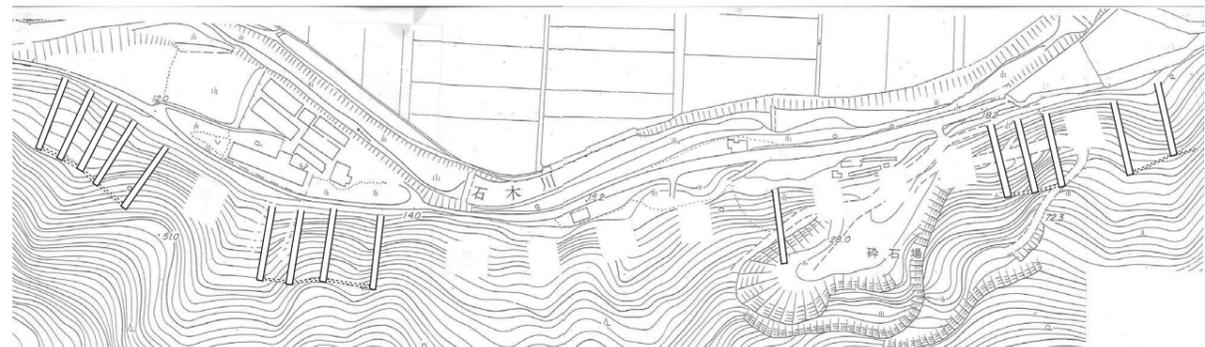


●周辺の関連施設
反耐爆型工場跡



半耐爆型建造物

内幅7.7m、奥行き約100m、高さ3.75mでコンクリートの壁のみが残っています。大型機械の操業や各種資材などを収納していました。現在は、奥行ききの党中に民家が建っています。

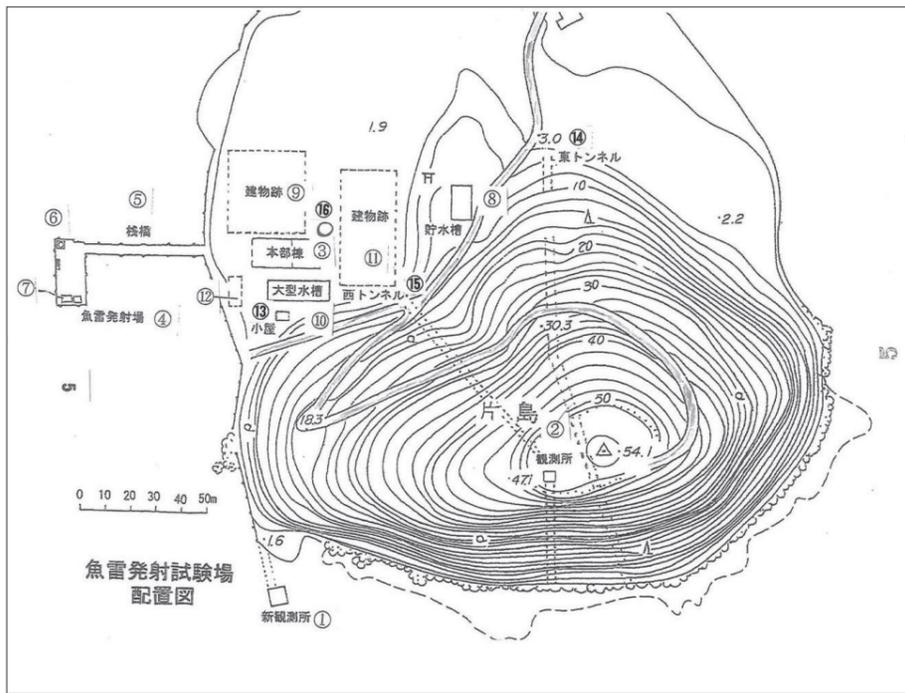


片島魚雷発射試験場跡 (三越郷)

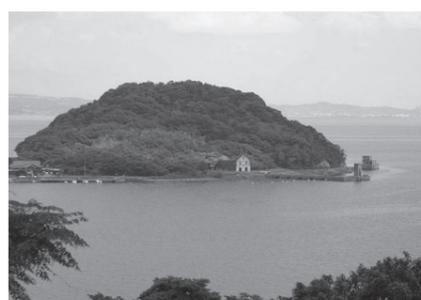
みつごえじょう

佐世保鎮守府が開庁されて間もなく、海軍工廠が佐世保湾の北岸に開設された。この工場で製造される魚雷の発射試験をため大正七年（一九一八年）川棚村三越郷の片島（標高五四・一m）に魚形水雷発射試験場が設置された。

発射した魚雷の進行状況を頂上の観測所から観測し性能試験を行った。



太平洋戦争勃発後、昭和十七年（一九四二年）川棚に分工廠が開庁されたことに伴い、魚雷発射の施設をさらに拡張し発射試験を行った。その際に片島は海峡が埋め立てられ陸続きとなった。



学徒動員の山下勝さんの証言

山下さんは、旧制島原中（現 島原高）3年だった1945年4月ごろ、学徒動員で川棚に来た。「都城、対島、佐賀・・・九州各地から川棚に学生や挺身隊が何万人と来とったですよ」。川棚海軍工廠では魚雷の組み立てを手伝っていた山下さんは、ほどなくして魚雷発射試験場へ配属。当時、試験場で働いていたのは兵隊15人と学徒6人、4日〜1週間に1回程度、魚雷の発射試験が行われた。長さ約5mの魚雷は、川棚海軍工廠から馬車で運ばれ、片島に掘られたトンネルに収納。発射試験の際には、運搬用のレールが敷かれていた棧橋を通り、発射場へ運ばれた。

バンバンバン・・・。工場の技術者らも見守る中、ぴかぴかに磨かれた魚雷に音を立てて圧縮空気が送り込まれる。試験場から南へ真つすぐ、1.5mほど先にある2隻の監視船の間を狙い、魚雷は爆音を立てて発射された。しかし、そのほとんどが途中で浮かび上がった。大きく曲がりたりした、「1日8本くらい試験をして、合格したのは3本くらい。製造には素人も関わったからか、程度が低かった」基準を満たした魚雷は、上陸用の舟艇に載せ、佐世保港へ。「港は最初のころは潜水艦もおったですが、戦争がひどくなってからは空襲でやられちゃって、なんもなかったです、魚雷の受け取るもんもおらんくなって変に思いよつた」。戦闘で半壊状態になった航空母艦の姿。周辺に漂う戦況の変化を山下さんは感じ取っていた。



その他の証言

試験場の観測所は、1階の沖側の壁に丸い窓が四つあり（沖側に向かっている）、この地点から100m北西に発射場が設置されている、ここから発射された魚雷は、視認されにくい水深2〜3mを潜航して敵艦に命中し爆破沈没させざる時は最新兵器だった。一階の沖側の窓はこの魚雷の潜航推進状況を確認するための必要な窓で数人の担当試験管が確認していた。

番号	施設名	画像	役割	大きさ(m)	地階
①	魚雷試験観測所 (海上) (南西側の観測所)		昭和17年(1942年)川棚海軍工廠が建設された際に建設された。魚雷の進行状況(水中3~5mの深さ)を確認、海中の音波の測定を行ったと推定 片島との間に木製の渡し橋があったが老朽化し海中へ崩落した。	東西約 7.0 南北約 7.0 高さ約 6.0	3
②	旧試験魚雷の観測所 (片島山頂の観測所)		大正7年(1918年)頃建設、当初は木造で、その後改築された。 試験に合格した魚雷は佐世保鎮守府に送られた。	東西 5.0 南北 4.0 高さ 5.6	2
③	本部建物		島内で最も大きな遺構です。魚雷の性能試験、不具合の調整、事務室として利用されていた。	東西 27.4 南北 12.8 高さ約 10	2
④	魚雷発射塔		⑦から発射された魚雷の確認を行った。	東西 3.0 南北 3.1 高さ 7.0	3
⑤	5連アーチ棧橋		複線のレールを使用し魚雷を運搬した。右側に試験する魚雷、試験済みの魚雷を左側に乗せた。		
⑥	クレーンの基礎台 (起重機跡)		資材の荷役を行った。		
⑦	魚雷の発射装置 (魚雷発射管)		魚雷発射装置に圧搾空気(215気圧)の詰め込みを行った。 試験魚雷を抱きかかえるように固定し吊り下げ、浮力等を精密測定した。		
⑧	東側の貯水槽		試験した魚雷に付着した海水を水洗いした。	東西 8.4 南北 13.4 深さ 2.3	-
⑨	本部北側の基礎		昭和14~16年に建設。魚雷の整備、試験後の調整、荷造り作業、検印(長)や発送を行っていた。	東西 30.7 南北 32.7 高さ 1.1	
⑩	大型の水槽		魚雷を水槽に浮かして、各試験をするための水槽。	東西 25.0 南北 8.0 深さ 1.5	-
⑪	本部東側の基礎		⑨の検印や塗装、確認・記録や荷造りを行っていた。	東西 22.2 南北 45.9 高さ 0.8	
⑫	本部西側の基礎		魚雷を真水で洗い、塩分の付着を完全に洗い落とし⑨へ運んだ	東西 5.3 南北 12.2 高さ 0.2	
⑬	本部の南の小屋 (石造)		③の本部に隣接する小さな建物で、精密機械や資材を収納したとされる。	東西 5.4 南北 3.6 高さ 3.8	1
⑭	東側トンネル		片島を南北に貫通するトンネルが東部と西部に2箇所掘られ、東部は工廠同時期に作られた。現在は東西部とも天井部分が崩落している。	幅 4.5 長さ 150 高さ 3.5	
⑮	西側トンネル			幅 4.4 長さ 140 高さ 3.2	
⑯	井戸3カ所の直径		試験後の魚雷の水洗い用の真水を貯水した。	西 4.2 北 3.0 東 1.0	

川棚臨時魚雷艇訓練所跡(小串郷)と特攻殉国の碑(新谷郷)

3千500余名の名を刻む「特攻殉国の碑」が建立される新谷郷には、かつて海軍の水上特攻艇「震洋」の訓練基地となった「川棚臨時魚雷艇訓練所」があった。

●特攻兵器の開発

昭和十七年六月、日本はミッドウェー島攻撃、同海戦で大敗し主力空母四隻とベテラン搭乗員多数を失った。七月、ソロモン、ガダルカナル島(ガ島)攻防戦が始まり、翌十八年二月、ついにガ島敗退となり、敗色が濃くなっていった。九月には大本営発表で戦線縮小が告げられ、十月二十一日には神宮外苑で学徒出陣壮行会(いわゆる兵役延期措置廃止による。)が行われ、ペンを銃に持ち替えて戦線に馳せ参じる戦況となり、翌十九年になると米機動部隊はトラックやマリアナを空襲、米潜水艦は南方列島、南西諸島、台湾方面に現れるようになった。

震洋艇隊の訓練が始まったのはこのころであった、すなわち十九年四月、軍令部総長は海軍大臣に対し、仮称①金物から④金物までの九項目からなる兵器の特攻緊急実験を提案した。艦政本部各部署で慎重に検討した結果、

- ④金物 舷外機付衝撃艇(のち「震洋」) ※④艇(マルヨン艇)と略称された。
 - ⑥金物 人間魚雷 (のち「回天」)
 - ⑦金物 特殊部隊用兵器(のち「震海」) ※実用には至らなかった。
- の三つが採用され、主務部を決めて試作に取りかかった。

●特攻兵器「震洋」

「震洋」は海軍唯一の水上特攻艇で乗員一名のI型(いちがた)と、乗員二名のV型(ごがた)があった。艇首に二五〇キログラムの爆装をし、トヨタ自動車エンジンを搭載した高速ボート(速力二五〇ノット)で敵の揚陸部隊が上陸点に進入する前後に、夜闇に乗り集団で奇襲し、体当たり攻撃により船舶を撃沈するものであった。

I型は、はじめ艇首爆装だけであったが、二十年初頭には一二インチ噴水砲

●川棚臨時魚雷艇訓練所の開設

昭和十八年(一九四三年)、南太平洋(ソロモン、ガダルカナル島)における戦いは、日本の補給路が延び切った戦線であり、米軍側にとっては、それまでの相次ぐ撤退戦から始めて反撃に転じた戦いであった。この南太平洋で、米軍は空軍とともに魚雷艇を駆使して、日本軍の補給線を破壊し補給を断つことに成功し、この反省から、日本軍は魚雷艇隊の増強を急ぐため、適地調査を行った。横須賀(東京湾)は地理的条件が魚雷艇訓練には不向きのため、琵琶湖をはじめ調査の結果、昭和十八年十二月、波静かな大村湾沿いの川棚町小串浦に候補地を決定した。

海軍水雷学校(横須賀)はこれに先立つ昭和十八年十一月、魚雷艇訓練所を川棚に設置すべく、加藤寛大佐・羽仁健三主計大尉を設置準備委員に発令。この二人を中心に、用地買収・構内の民家移転・施設の建設工事が進められ、翌十九年五月、川棚町小串郷に海軍水雷学校の分校として「川棚臨時魚雷艇訓練所」が開設した。

所長原為一大佐、副官福岡義雄少佐、講習隊隊長石井勲中佐、学生隊長末次信義少佐、分隊長田代綱人少佐、主計長羽仁健三天尉が幹部をつとめ、大尉・中尉クラスが教官となった。

訓練所開設と同時に、第一期魚雷艇学生(海軍第三期予備学生出身)が入所し、第一期生は水雷学校に二月六日に入校した約三百人のうちの大部分で、三カ月の訓練を経て川棚町へ移ったのである、この第一期魚雷艇学生(約三百人)の魚雷艇訓練は七月に終わり、魚雷艇教官に残る者、水中特攻隊(回天・蛟龍)へ赴任する者と、それぞれ配置についた。追いかけるように、七月十五日、第二期魚雷艇学生(海軍第四期予備学生出身)の約四百人が入所した。この時に、学生兵舎が増築され、合わせて二棟となった。

●震洋特攻隊の訓練と展開

マルヨン艇すなわち震洋の講習(訓練)は昭和十九年七月から横須賀の水雷学校で始まった。横須賀では、一次、二次と三次の訓練までで、三次の一部(八月より)と四次講習(九月)からは川棚で始まった。

(ロサ弾)二基を装備した。その他、防潜網・流木対策および推進器保護装置などを備えた。V型は、I型と同じ装備のほか一三ミリ機銃一丁と一部指揮艇、小隊長艇には三式空一号無線電話器艦艇用を、その他の艇には受話器だけが装備された。生産隻数はI型、V型を合わせて終戦までに約六千二百隻にのぼった。

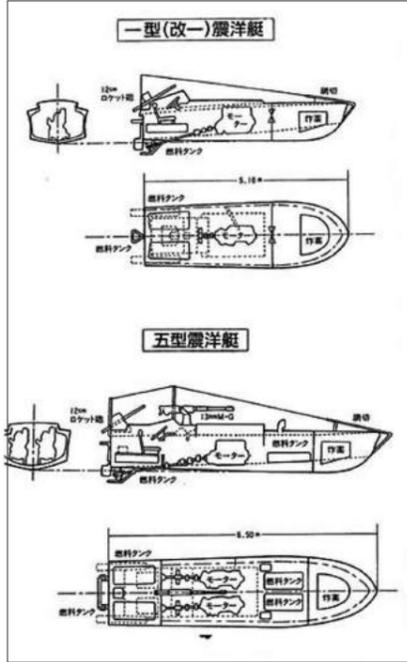
区分	I型艇	V型艇
全長	5.1m	6.5m
幅	1.67m	1.86m
高さ	0.8m	0.9m
普通吃水	0.326m	0.380m
満載吃水	0.55m	0.60m
排水量	1.295t	2.2t
主機関	トヨタ特KC型 ガソリンエンジン 1基	トヨタ特KC型 ガソリンエンジン 2基
速力(特別全力)	10kt(23kt)	27kt(32kt)
馬力(特別馬力)	424P.(67HP)	(134HP)
全航続距離	16kt-----110'(7h)	27kt-----170'
兵装	爆装250kg	爆装250kg
	12cm口ヤ弾×2発	12cm口ヤ弾×2発 13mm機銃1 無線設備(予定)
乗員	1名	2名

月別	昭和19年	8	9	10	11	12	昭和20年	1	2
竣工数	75	100	745	700	650	600	500	500	500
月別	3	4	5	6	7	8	合計		
竣工数	400	249	483	395	150	50	6197		

造船所：三菱長崎造船所、日本造船鶴見工場、同山下工場、横浜ヨット、隅田川造船所、日本海船船、神奈川船船、日本車輦、木村工作所、豊田機機。(三菱造船江南製作所=中国上海)



震洋



《講習(訓練)》

講習(訓練)は、艇の性能と扱いのほか、局地戦闘法・襲撃法・陣形・突撃体形などが教えられた。訓練期間は二カ月(三次までは一ヶ月)で基礎が終わると部隊編成されて佐世保防備隊へ移り、ここで軍需物品を整えて、配備基地への出撃となる。

十一月からは、前述の通り一個分隊増えて、二個分隊で訓練され、毎月交互に訓練終了・部隊編成・出撃待機となった。

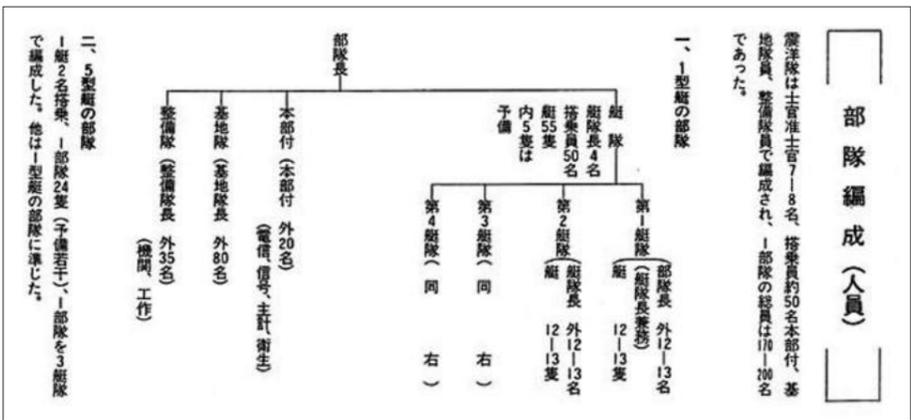
《部隊編成》

一個分隊は八個部隊、のちに十個部隊の編制であった。

震洋隊は士官・准士官七〜八名、搭乗員約五十名と本部付・基地隊員・整備隊員で編成され、一部隊の総員は百七十〜二百人であった。

I型艇の部隊は、部隊長の下に第一〜第四の四つの艇隊が置かれ、それぞれに艇隊長のほか搭乗員十二人・艇十二隻(四艇隊)が配置された。艇は合わせて五十五隻、うち五隻は予備である。

V型艇の部隊は一艇二名搭乗、一部隊二十四隻(予備若干)で、一部隊を三艇隊で編成した。ほかはI型艇の部隊に準じた。



《展開と戦果》

I型隊は六十八個部隊、V型隊は四十六個部隊が編成され、フィリピン方面、小笠原諸島方面へ、その後南西諸島へ、そして台湾、中国沿岸（海南島・香港・舟山島）、済州島へと向かい、さらには本土の各地に展開した。このうち第十二（コレヒドール）・第二二・第四二震洋隊だけが体当たり攻撃を行った。

第二二震洋隊松枝部隊は昭和十九年十二月十五日マニラ着、第三南遣艦隊司令部の命を受け、マニラに上陸することなくコレヒドール島（コ島）の守備についた。

昭和二十年一月中旬から、米軍はコ島に空襲、二月十日より艦隊が洋上から艦砲射撃を始め、コ島の日本軍は大打撃を受けた。第十二震洋艇は無傷で、十五日「スピック湾内敵船団を撃滅すべし」の命令を受けた。十六日午前二時ごろ出撃、敵船三隻を撃沈、部隊長以下搭乗員全員は特攻死した。出撃後、基地隊員はコ島防衛部隊の指揮下にはいり、圧倒的な物量を持つ米陸海空からの攻撃に全員賛華した。

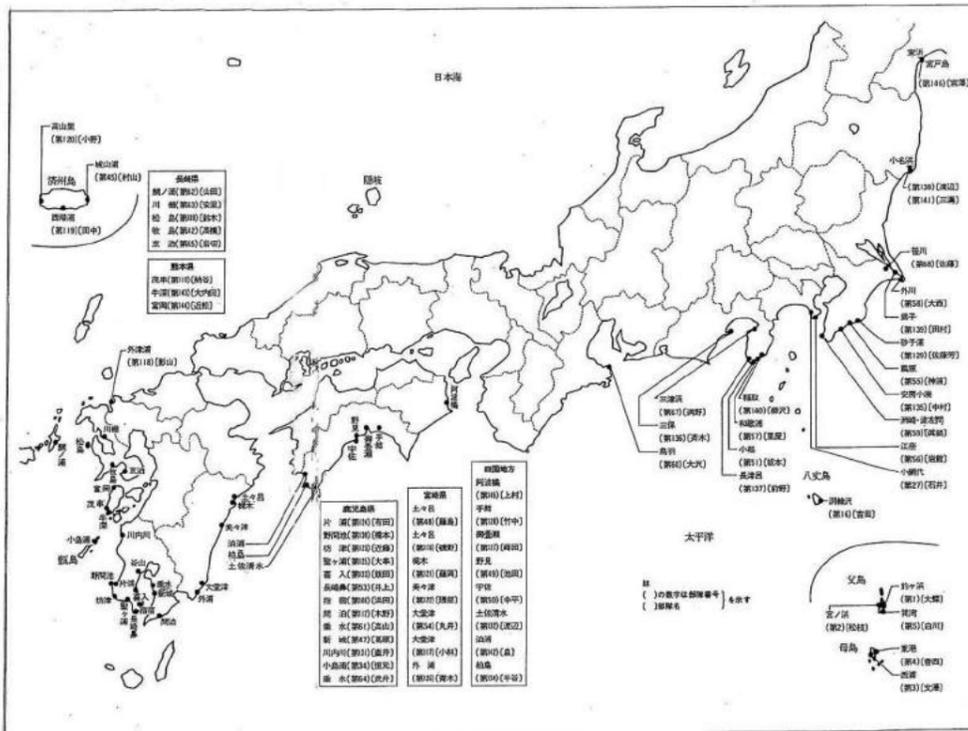
震洋艇隊の夜間隠密攻撃で米軍は、空軍による攻撃と錯覚し、あわてて空へ探照灯を向け、高射砲を撃ち、恐怖と混乱に陥ったのだが、この時の米軍の戦闘記録は「航空機による被害三隻」となっている。この時以来、米軍の水上特攻艇への備えが厳重になってきた。

第二二震洋特別攻撃隊豊田部隊の場合、川棚の訓練所（第四次）で昭和十九年十月二十九日編成。翌二十年一月二日、豊栄丸（三五〇〇トン）で佐世保を出港、沖繩へ。二十六日金城湾に着き、艇と兵器資材を陸揚げし、部隊をあげて艇格納壕を掘り。三月十四日、訓練中にB24の攻撃を受けて戦死者十九名、震洋艇は十隻が失われた。第三次攻撃の四月三日〜四日、震洋艇五隻が出撃し、市川・鈴木艇が敵艦に体当たり攻撃をかけて撃沈する戦果を上げた。

佐世保を出撃した部隊総員百七十九名中戦士七十四名（うち病死二）、不明二名、復員できたのは百二名であった。



震洋隊配備図



●特攻兵器「回天」

回天（かいてん）は、太平洋戦争で大日本帝国海軍が開発した人間魚雷であり、日本軍初の特攻兵器である。

一九四四年七月に二機の試作機が完成し、十一月八日に初めて実戦に投入された。終戦までに420基が生産された。兵器としての採用は一九四五年五月二十八日のことだった回天は超大型魚雷「九三式三型魚雷（酸素魚雷）」を転用し、特攻兵器としたものである。九三式三型魚雷は直径61cm、重量2.8t、炸薬量780kg、時速48ノットで疾走する無航跡魚雷で、主に駆逐艦に搭載された。回天はこの酸素魚雷を改造した全長14.7m、直径1m、排水量8tの兵器で、魚雷の本体に外筒を被せて気蓄タンク（酸素）の間に二人乗りのスペースを設け、簡単な操船装置や調整バルブ、襲撃用の潜望鏡を設けた。炸薬量を1.5tとした場合、最高速度は時速55km/hで23キロメートルの航続力があつた。ハッチは内部から開閉可能であったが、脱出装置はなく、一度出撃すれば攻撃の成否にかかわらず乗員の命はなかつた。



回天

回天の断面略図



●特攻兵器「伏龍」

日本海軍による特攻兵器の一つである「伏龍」は、潜水具を着用し棒付き機雷を手にした兵士により本土決戦における上陸用舟艇の水際撃滅を狙った特攻兵器。「人間機雷」といわれていた。

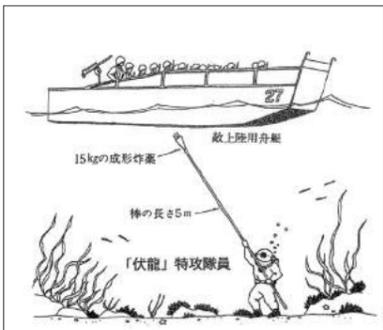
《伏龍の誕生》 海軍軍令部の発案によるものといわれており、航空機が不足し余剰人員となった予科練生徒を「有効に活用」するため、もとは昭和二十年二月に米軍爆撃機B29が投下した磁気機雷を掃海するため開発された簡易潜水具を攻撃兵器に転用されたもので、実験は横須賀防備隊で行われた。

《配備・展開》 隊員の多くは、航空機搭乗員として身体能力に優れた10代後半の予科練出身者が選抜された。選抜条件には「孤独に耐える者」が重視され、長男が多く選ばれた。伏龍部隊は鎮守府に所属し、佐世保鎮守府には二個大隊が配備される予定で、川棚臨時魚雷艇訓練所（第三特攻戦隊）で昭和二十年（一九四五年）六月から訓練を受けた。部隊の展開時期は十月末を目標にされていたが、終戦を迎えたため実戦に投入されることはなかつた。

《効果》 海中では、視界も悪く動きも鈍くなるため、上陸用舟艇に向かって移動するのは事実上不可能であった。棒機雷は長い柄を持つていたが、水の抵抗がある海中では自由にこれを振り回すこともできず当初5mの長さが、2mに切りつめられた。また棒機雷の炸薬量では舟艇を直撃しないと被害を与えることはできず、数メートル離れたところ通過しても突き刺すことは不可能だった。また、舞台の展開密度を上げると棒機雷が炸裂した時の爆圧で、近くの隊員まで巻き添えになるどころか次々と誘爆してしまふ問題があつた。そもそも、海中での爆発による強烈な水圧は隊員に致命的なダメージをもたらすため、上陸に先立つ準備砲撃が付近の海中に落ちただけで、伏龍部隊の大部分は駆逐されていたといわれている。訓練中も事故や死亡者が多く、机上の空論に基づく兵器であり、実戦に用いられた場合に成功する可能性はなく当時の首相すら実戦使用に反対していたといわれています。



伏龍隊員



陸海軍特攻兵器一覧表

区分	兵器	乗員	速力	爆装	摘要
陸軍	1.一式戦闘機(隼)	1	515km/h	250kg×2	襲撃機として併用
	2.二式戦闘機(層龍)	1(2)	547	500×1	
	3.三式戦闘機(飛燕)	1	591	250×2	練習機用
	4.四式戦闘機(疾風)	1	542	250×2	
	5.九七式戦闘機	1	470	250×2	練習機用
	6.九九式襲撃機	1(2)	425	500×1	
	7.九八式直協偵察機	1(2)	348	250×1	練習機用
	8.百式司令部偵察機	2	630	500×1	
	9.九九式双発車軽爆撃機	1(5)	502	800×1	菊水隊の場合 空挺隊の場合
	10.四式重爆撃機(飛龍)	1(6)	537	800×2	
	11.百式重爆撃機(呑龍)	6~8	492	500×1	
	12.九七式重爆撃機	14	474	—	
航空特攻	1.零式艦上戦闘機	1	560km/h	250kg×1	練習機用
	2.夜間戦闘機(月光)	2	504	500×1	
	3.艦上爆撃機(彗星)	2	580	500×1	
	4.九九式艦上爆撃機	2	425	250×1	
	5.艦上攻撃機(流星)	2	543	500×1	
	6.艦上攻撃機(天山)	3	481	魚雷又は 500×1	
	7.九七式艦上攻撃機	3	380	同上	練習機用
	8.陸上爆撃機(銀河)	3	555	800×1	
	9.陸上偵察機(彩雲)	3	635	500×1	桜花母機 練習機用
	10.ロケット特攻機(桜花)	1	700	1200(頭部)	
	11.一式陸上攻撃機	7	435	—	
	12.九六式陸上攻撃機	5	376	魚雷1又は 500×1	
	13.練習機(白菊)	2	230	250×1	
	14.零式水上偵察機	2	375	250×1	
水中特攻	海軍	特殊潜航艇(甲標的)甲型	2	19ノット 水上6.5 水中18.5 水上8.8 水中16.0 水上7.5 水中10.0	魚雷×2
		特殊潜航艇(甲標的)丙型	3		〃
		特殊潜航艇(蛟龍)丁型 特攻潜航艇(海龍)	5 2		魚雷×2 500kg(頭部)
		人間魚雷(回天)	1	30ノット	1536(頭部)
水中特攻	陸軍	肉迫攻撃艇(㊦)	1	23ノット	250(艇尾)
	海軍	特攻艇(霞洋)一型 五型	1 2	23 32	250(頭部)
空挺特攻	陸軍	百式輸送機 零式輸送機(海軍機)	15 14~20	430km/h 350	— —
水際特攻	海軍	潜水特攻(伏龍)	1	潜水歩行	15(襲雷)
1936	陸軍	九七式中戦車	6	30km/h	20(頭部)
		九五式軽戦車	5	40	〃

●特攻殉国の碑と慰霊祭

終戦から二十年あまりたった昭和四十一年夏、東京在住の益田善雄氏(第二〇三震洋隊長。海兵七三期)から慰霊碑建立の話が出され、有志が佐世保や東京で話し合つて具体化し、元海軍水雷学校長大森仙太郎中将から多額の寄付も寄せられ、九月には建立委員会ができた。沖繩からは安里芳雄氏(海兵七〇期)が上京し、益田氏とともに援護局での調査に長期わたつて努力され、千九百五十名の戦死(没)者を確認した。

建立の場所は、横須賀の海軍水雷学校跡地をという案もあったが、碑の維持管理、慰霊祭の挙行、事務局設置の点などで有利な川棚臨時魚雷艇訓練所(震洋隊訓練地)跡地に決まった。

川棚町役場や地元総代と用地の折衝、土地の買収に勢力を傾け、郷有地百九十四坪、個人所有地の買収百四坪、計二百九十八坪の敷地と募金も順調に進み、昭和四十二年春までに土地・資金の確保ができた。

碑石は長崎県特産の銘石蛇紋岩を選び、さらに震洋特攻艇攻撃を行ったフィリピンのコレヒドール島および沖繩の石を水谷秀澄(元震洋担当訓練隊長・海兵六二期。当時海上自衛隊佐世保地方総監)、安里芳雄(沖繩在住・震洋分隊長)の両氏からそれぞれ送つてもらい、碑の上部にちりばめて彩りを添えた。

碑の設計施工を県内の石材店に依頼し、整地・石垣造成、植栽などは奉仕作業によって整備され、地元企業から整地作業への協力もあり、昭和四十二年(一九六七年)五月二十七日に除幕式と第一回慰霊祭が挙行された。

●増改築と戦没者の増刻

建立後に判明した戦没者は四百五十四名にも及んだので昭和四十四年五月、碑に並んで別碑を建てたが、これも刻名のスペースが不足するに至つた。昭和五十九年夏、九州・東京・大阪の世話人らが協議し、碑の増改築計画を特攻殉国の碑保存会(事務局 西村真珠内)会報に発表、再び募金を仰ぎ、昭和六十年四月から旧碑の上部を解体して増築し五月に竣工。五月十九日に増改築碑建立除幕式および慰霊大祭を行った。このときの刻名者数は三千四百五十名

となった。

その後、昭和六十三年度中に第十六震洋隊、第二二八震洋隊を中心に判明した戦死者の名を増刻して、平成十六年現在には次のとおりである。

震洋特攻隊員 二五二四名
魚雷艇隊員 七八三名
その他の突撃隊員 一八〇名
回天隊員 二四名
計 三五一一名

慰霊祭は昭和四十二年五月を第一回として、毎年五月に欠かすことなく挙行し、五年毎には大祭として各部隊会合も併せて催してきた。平成十五年五月十一日(日)は三十七回目の慰霊祭となった。部隊員の加齢とともに、出席者が減つたため、大祭は平成十二年で最後となったが、慰霊祭は新谷郷会を中心に挙行されている。



川棚町新谷郷「特攻殉国の碑」前で執り行われる慰霊祭。昭和42年5月27日を第1回として、毎年5月に欠かさず挙行されてきた。儀仗隊や音楽隊の参列をはじめとする海自佐世保地方総監部の力強いご支援と、祭場の設営から湯茶の接待、後片付けまで、新谷郷あげての心温まるご協力に負うところが大きい。



殉国の碑

お立ち寄り店舗&施設

● お食事スポット

④ レストラン ディーノ



三越郷323-1
11:30~22:00(OS)21:00
16:00~17:00(喫茶)
☎0956-82-2582
☎水 ☎有

⑤ 民宿 海幸



三越郷348-1
11:00~21:00
☎0956-83-2888
☎無休 ☎有

⑥ 民宿 遊海



三越郷150
☎0956-82-5384
☎有

⑦ 展望台ドライブイン



小串郷831-1
11:00~20:00
☎0956-82-3974
☎火 ☎有

⑧ 焼き立てパン パール



小串郷1480-3
7:30~19:00
☎0956-82-3118
☎水 ☎有

⑨ 民宿 磯の家



小串郷2386-1
☎0956-82-5347

⑩ 元祖 天空房 山水



新谷郷1077-1
11:00~17:00
☎0956-82-4840
☎木 ☎有

川棚には美味しいお店、ゆっくり癒される宿が随所にご 있습니다。旅の合間に、是非お立ち寄りください。

☘ スイーツスポット

⑪ 菓舗 いさみ屋



栄町15-1
8:00~19:00
☎0956-82-2310
☎不定休 ☎有



⑫ Sweets夢工房 ル・リアン



新谷郷152-2
10:00~20:00
☎0956-82-3714
☎水 ☎有

🏠 宿泊・休憩 施設

⑬ 国民宿舎 くじゃく荘



小串郷272
in 15:00 out 10:00
☎0956-82-2661

⑭ 民宿 海幸



三越郷348-1
in 16:00 out 10:00
☎0956-83-2888

⑮ 民宿 磯の家



小串郷2386-1
in 16:00 out 10:00
☎0956-82-5347

⑯ 旅館 かわはら



百津郷447
in 15:00 out 10:00
☎0956-82-2030

⑰ 川棚ニュークレイン観光ホテル



百津郷448-4
in 15:00 out 10:00
☎0956-82-2173

⑱ 民宿 遊海



三越郷150
in 16:00 out 10:00
☎0956-82-5384

⑲ ペンション セントフェニックス



新谷郷1968-1
in 15:00 out 10:00
☎0956-83-2433

⑳ 川棚大崎温泉 しおさいの湯



小串郷237
9:30~22:00
☎0956-82-6868
☎第2水曜日

長崎和牛

川棚町は日本一の和牛の産地です。

肉本来の旨味を持つ赤身と、まろやかな脂身の絶妙なバランスが特徴の「長崎和牛」。平成24年に開催された「和牛のオリンピック」こと、全国和牛能力共進会長崎県大会(肉牛の部)で内閣総理大臣賞を受賞、和牛日本一となりました。

この時出品した和牛は川棚町で育った和牛でこの日から川棚町は日本一の長崎和牛の産地となりました。

ぜひ、町内各店舗で、自慢の長崎和牛メニューをご賞味ください。

《長崎和牛メニュー提供店》

- キッチンサカイ …………… ☎0956-83-2112
- ゆめうさぎ …………… ☎0956-82-2006
- レストラン まゆみ …………… ☎0956-82-2971
- 酒菜 谷 …………… ☎0956-82-3310
- 川棚駅前 みなとや食堂 …………… ☎0956-83-2309
- 美咲食堂 …………… ☎0956-82-2213

川棚町内医療機関

長崎川棚医療センター	☎0956-82-3121
ひろ皮ふ科クリニック	☎0956-82-3001
みやた小児科医院	☎0956-82-3735
本川医院	☎0956-82-2010
山本整形外科	☎0956-82-2495
田淵医院	☎0956-82-2111
青木耳鼻咽喉科医院	☎0956-83-3355
カナザワ内科クリニック	☎0956-83-3727
にいむら整形外科	☎0956-82-6565
岡部内科医院	☎0956-82-5005
玉川医院	☎0956-82-4126

タクシー

- 株式会社マユミタクシー 川棚町栄町82 ☎0956-82-3151
- こうげんタクシー 川棚町白石郷7-10 ☎0956-82-5151

警察署

川棚警察署 川棚町百津郷 ☎0956-82-3110

交通アクセス

長崎空港から
エアポート・バスで約40分(川棚下車)

福岡から
車で約1時間30分(東そのぎICより、佐世保方面へ約8分)

東京から
飛行機で約2時間(長崎空港まで)

大阪から
飛行機で約1時間20分(長崎空港まで)

波佐見・有田から
車で波佐見・有田IC 川棚駅方面へ約10分

JR長崎駅から
JR大村線快速 約1時間(JR川棚駅下車)



お問い合わせ

川棚町役場 地域政策課 商工観光係
〒859-3692 長崎県東彼杵郡川棚町中組郷1518-1
☎ 0956-76-8335 / FAX:0956-82-3134
<http://www.kawatana.jp/kankou/>

かわたな観光が이드 検索